

日本文学
全集

夏目漱石集(二)





© 1967

日本文学全集16 夏目漱石集(二)

昭和四十二年六月七日印刷
昭和四十二年六月十二日発行

著者 夏目漱石

発行者 陶山 巖

印刷者 高橋武夫

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区神田一ツ橋二ノ三

電話東京(366)六二二 振替東京一五六三

印刷 大日本印刷株式会社

製本 本文堂製本株式会社

製函 石橋製本有限公司

本文用紙 東京紙器株式会社

クロス 東北バルブ株式会社

定価 二九〇円

落丁、乱丁本はお取りかえします
検印 廃止

日本文学全集

夏目漱石集(二)

集英社



編集委員（五十音順）

伊藤 整

井上 靖

中野 好夫

丹羽 文雄

平野 謙

幀 平

伊藤 憲治

絵 初山

滋

挿 装

目次

それから

七

ころ

一九五

夢十夜

三六二

硝子戸の中

三八〇

注解

四六

作家と作品

荒
正人

四二五

年表

四三七

夏目漱石集(二)

それから

一

誰か慌ただしく門前を馳けて行く足音がした時、代助の頭の中には、大きな俎下駄が空から、ぶら下がっていた。けれども、その俎下駄は、足音の遠退くにしがたって、すうと頭から抜け出して消えてしまった。そうして眼が覚めた。

枕元を見ると、八重の櫓が一輪畳の上に落ちてゐる。

代助は昨夕床の中でたしかにこの花の落ちる音を聞いた。彼の耳には、それが護謨毯を天井裏から投げつけたほどに響いた。夜が更けて、四隣が静かなせいかもしれないが、念のため、右の手を心臓の上に載せて、肋のはずれに正しく中たる血の音を確かめながら眠りに就いた。

ぼんやりして、しばらく、赤ん坊の頭ほどもある大きな花の色を見つめていた彼は、急に思い出したように、

寝ながら胸の上に手を当てて、また心臓の鼓動を検しはじめた。寝ながら胸の脈を聴いてみるのは彼の近來の癖になつてゐる。動悸は相変らず落ちついてたしかに打つてゐた。彼は胸に手を当てたまま、この鼓動の下に、温かい紅の血潮のゆるく流れるさまを想像してみた。これが命であると考えた。自分は今流れる命を掌で抑えているんだと考えた。それから、この掌に伝える、時計の針に似た響は、自分を死に誘う警鐘のようなものであると考えた。この警鐘を聞くことなしに生きてゐられたなら、——血を盛る袋が、時を盛る袋の用を兼ねなかつたなら、いかに自分は気楽だろう。いかに自分は絶対に生を味わい得るだろう。けれども——代助は覚えざつとした。彼は血潮によつて打たるる掛念のない、静かな心臓を想像するに堪えぬほどに、生きたがる男である。彼はときどき寝ながら、左の乳の下に手を置いて、もし、ここを鉄槌で一つ撲されたなと思うことがある。彼は健全に生きていながら、この生きてゐるというだいたいようぶな事実を、ほとんど奇蹟のごとき僥倖とのみ自覚しだすことさえある。

彼は心臓から手を放して、枕元の新聞を取り上げた。夜具の中から両手を出して、大きく左右に開くと、左側に男が女を斬つてゐる絵があつた。彼はすぐ外の頁へ眼

を移した。そこには学校騒動が大きな活字で出ている。代助は、しばらく、それを読んでいたが、やがて、倦怠（だう）そうな手から、はたりと新聞を夜具の上に落とした。それから煙草（たばこ）を一本吹かしながら、五寸ばかり布団（ふだん）を摺（ず）り出して、畳の上の椿（つばき）を取って、引っ繰り返して、鼻の先へ持って来た。口と口髭（くちげ）と鼻の大部分がまったく隠れた。煙は椿の瓣（はなびら）と蕊（ずい）に絡（から）まって漂うほど濃く出た。それを白い敷布の上に置くと、立ち上がって風呂場へ行った。

そこで丁寧に歯を磨いた。彼は歯並（はなびら）のいいのを常に嬉しく思っている。肌を脱いで奇麗に胸と背を摩擦した。彼の皮膚には濃やかな一種の光沢がある。香油を塗りこんだあとを、よく拭き取ったように、肩を揺（ゆ）かしたり、腕を上げたりするたびに、局所の脂肪（しじふ）が薄く漲（も）って見える。彼はそれにも満足である。次に黒い髪を分けた。油を塗けないでもおもしろいほど自由になる。髭も髪同様に細くかつ初々（うぶ）しく、口の上を品よく蔽（おほ）うている。代助はそのふっくらした頬を、両手で両三度撫（な）でながら、鏡の前にわが顔を映していた。まるで女がお白粉をつける時の手つきと一般であった。実際彼は必要があれば、お白粉さえつけかねぬほどに、肉体に誇（も）りをおく人である。彼のもっとも嫌うのは羅漢（らかん）のような骨骼（こつかく）と相好（さうご）で、

鏡に向うたんびに、あんな顔に生れなくて、まあよかったと思うくらいである。その代り人からお洒落（しやれ）と言われても、何の苦痛も感じ得ない。それほど彼は旧時代の日本を乗り超（こ）えている。

約三十分の後彼は食卓に就いた。熱い紅茶を啜（す）りながら焼麵包（やんぱん）に牛酪（ぎゅうがく）をつけていると、門野（かどの）という書生が座敷から新聞を畳んで持ってきた。四つ折りにしたのを座布団のわきへ置きながら、

「先生、たいへんなことがはじまりましたな」と仰山（ぎやうざん）な声で話しかけた。この書生は代助を捕（とら）まえては、先生先生と敬語を使う。代助も、はじめ一二度は苦笑して抗議を申しこんだが、えへへ、だって先生と、すぐ先生にしてしまうので、やむを得ずそのままにしておいたのが、いつか習慣になって、今では、この男に限って、平氣に先生として通している。実際書生が代助のような主人を呼ぶには、先生以外に別段適当な名称がないということ、書生を置いてみて、代助もはじめて悟ったのである。

「学校騒動のことじゃないか」と代助は落ちついた顔をして麵包（やんぱん）を食っていた。

「だって痛快じゃありませんか」

「校長排斥（はいし）がですか」

「ええ、とうてい辞職もんでしよう」と嬉しがっている。

「校長が辞職でもすれば、君は何か儲かることでもあるんですか」

「冗談言っちゃいけません。そう損得ずくで、痛快がられやしません」

代助はやっぱり麵麩を食っていた。

「君、あれは本当に校長が悪らしくって排斥するの、他に損得問題があつて排斥するの、か知ってますか」と言いながら鉄瓶の湯を紅茶茶碗の中へ注した。

「知りません。何ですか、先生はご存じなんですか」

「僕も知らないさ。知らないけれども、今の人間が、得にならないと思つて、あんな騒動をやるもんかね。ありや方便だよ、君」

「へえ、そんなもんですかな」と門野はややまじめな顔をした。代助はそれぎり黙ってしまった。門野はこれより以上通じない男である。これより以上は、いくら行つても、へえそんなもんですかなで押し通して澄ましている。こちらの言うことが応えるのだから、応えないのだからで要領を得ない。代助は、そこが漠然として、刺激が要らなくつていいと思つて書生に使っているのである。その代り、学校へも行かず、勉強もせず、一日ごろ

ごろしている。君、ちつと、外国語でも研究しちゃどうだなどと言うことがある。すると門野はいつでも、そうでしょうか、とか、そんなもんでしようか、とか答えるだけである。決してしましようといふことは口にしない。またこう、意憤ものでは、そうはつきりした答がでないものである。代助のほうでも、門野を教育しに生れて来た訳でもないから、いい加減にして放っておく。幸い頭と違つて、身体のはうはよく動くので、代助はそこをおおいに重宝がつている。代助ばかりではない、従来からいる婆さんも門野のお蔭でこのごろはたいへん助かるようになった。その原因で婆さんと門野とはすこぶる仲がいい。主人の留守などには、よく二人で話をする。

「先生はいつたい何をする気なんだろうね。小母さん」

「あのくらいになつていらつしやれば、何でもできますよ。心配するがものはない」

「心配はせんがね。何かしたらよさそうなもんだと思うんだが」

「まあ奥さまでもお貰いになつてから、ゆつくり、お役でもお探しなさるおつもりなんですよ」

「いいつもりだなあ。僕も、あんなふうに一日本を読んだり、音楽を聞きに行つたりして暮らしたいいな」

「お前さんが？」

「本は読まんでもいいがね。ああいう具合に遊んでいたいね」

「それはみんな、前世からの約束だから仕方がない」

「そんなものかな」

まずこういう調子である。門野が代助の所へ引き移る二週間前には、この若い独身の主人と、この食客との間に下のような会話が あつた。

「君はどっかの学校へ行ってるんですか」

「もとは行きましたがあ。今は廃めちまいました」

「もと、どこへ行っただんです」

「どこってほうほう行きました。しかしどうも厭きつばいもんだから」

「じき厭になるんですか」

「まあ、そうですな」

「で、たいして勉強する考えもないんですか」

「ええ、ちよつとありませんな。それに近ごろ家の都合が、あんまりよくないもんですから」

「家の婆さんは、あなたのおっ母さんを知ってるんだってね」

「ええ、もと、じき近所にいたもんですから」

「おっ母さんはやっぱり……」

「やっぱりつまらない内職をしているんですが、どうも近ごろは不景気で、あんまりよくないようです」

「よくないようですって、君、いっしょにいるんじゃないですか」

「いっしょにいることはいますが、つい面倒だから聞いたこともありません。何でもよくこぼしてるようです」

「兄さんは」

「兄は郵便局のほうへ出ています」

「家はそれだけですか」

「まだ弟がいます。これは銀行の——まあ小使に少し毛の生えたぐらいなところなんでしょう」

「すると遊んでるのは、君ばかりじゃないか」

「まあ、そんなもんですな」

「それで、家にいるときは、何をしているんです」

「まあ、たいてい寝ていますな。でなければ散歩でもしますかな」

「外のものが、みんな稼いでるのに、君ばかり寝ているのは苦痛じゃないですか」

「いえ、そうでもありませんな」

「家庭がよっぽど円満なんですな」

「別段喧嘩もしませんがあ。妙なもんで」

「だって、おっ母さんや兄さんからいったら、一日も早

く君に独立してもらいたいでしょうがね」

「そうかもしれせんな」

「君はよっぽど気楽な性分とみえる。それが本当のところなんですか」

「ええ、別に嘘を吐く料簡もありませんな」

「じゃまったくの呑気屋なんだね」

「ええ、まあ呑気屋っていうもんでしょうか」

「兄さんは何歳になるんです」

「こうつと、取って六になりますか」

「すると、もう細君でも貰わなくちゃならないでしょう。兄さんの細君ができて、やっぱり今のようになっているつもりですか」

「その時になってみなくっちゃ、自分でも見当がつきません、なにしろ、どうかなるだろうと思ってます」

「その外に親類はないんですか」

「叔母が一人ありますがな。こいつは今、浜で運漕業をやってます」

「叔母さんが？」

「叔母がやってる訳でもないんでしょうが、まあ叔父ですな」

「そこへでも頼んで使ってもらっちゃ、どうです。運漕業ならだいぶ人が要るでしょう」

「根が怠惰もんですからな。おかた断わるだろうと思ってるんです」

「そう自任していちや困る。実は君のおつ母さんが、家の婆さんに頼んで、君を僕の宅へ置いてくれまいかという相談があるんですよ」

「ええ、何だかそんなことを言っていました」

「君自身は、いったいどういう気なんです」

「ええ、なるべく怠けないようにして……」

「家へ来るほうがいいんですか」

「まあ、そうですな」

「しかし寝て散歩するだけじゃ困る」

「そりゃだいじょうぶです。身体の方は達者ですか

ら。風呂でも何でも汲みます」

「風呂は水道があるから汲まないでもいい」

「じゃ、掃除でもしましょう」

門野はこういう条件で代助の書生になったのである。代助はやがて食事を済まして、煙草を吹かしだした。

今まで茶簞笥の陰に、ぼつねんと膝を抱えて柱によりかかっていた門野は、もういい時分だと思って、また主人に質問をかけた。

「先生、今朝は心臓の具合はどうですか」

この間から代助の癖を知っているので、いくぶんか茶

化した調子である。

「今日はまだいいじようぶだ」

「なんだか明日にも危しくなりそうですな。どうも先生みたように身体を気にしちゃ、——しまいいには本当の病気に取っつかれるかもしれませんよ」

「もう病気ですよ」

門野はただへええと言ったざり、代助の光沢のいい顔色や肉の豊かな肩のあたりを羽織の上から眺めている。

代助はこんな場合になるといつでもこの青年を気の毒に思う。代助からみると、この青年の頭は、牛の脳味噌でいっぱい詰まっているとしか考えられないのである。話をすると、平民の通る大通りを半町ぐらいしかついて来ない。たまに横町へでも曲がると、すぐ迷児になってしまふ。論理の地盤を堅に切り下げた坑道などへは、てんから足も踏みこめない。彼の神経系に至ってはなおさら粗末である。あたかも荒縄で組み立てられたかの感が起る。代助はこの青年の生活状態を観察して、彼は必竟何のために呼吸をあえてして存在するかを怪しむことさえある。それでいて彼は平氣にのらくらしている。しかもこののらくらをもつて、暗に自分の態度と同一型に属するものと心得て、なかなか得意に振舞いたがる。そのうえ頭強一点張りの肉体を笠に着て、かえって主人の神

經的な局所へ肉薄して来る。自分の神経は、自分に特有なる細緻な思索力と、鋭敏な感性性に対して払う租税である。高尚な教育の彼岸に起る反響の苦痛である。天爵的に貴族となった報いに受ける不文の刑罰である。これらの犠牲に甘んずればこそ、自分は今の自分になった。否、ある時はこれらの犠牲そのものに、人生の意義をもともに認める場合さえある。門野にはそんなことはまるで分らない。

「門野さん、郵便は来ていなかったかね」

「郵便ですか。こうっと。来ていました。端書と封書が。机の上に置きました。持って来ますか」

「いや、僕があっちへ行ってもいい」

齒切れのわるい返事なので、門野はもう立ってしまった。そうして端書と郵便を持って来た。端書は、今日二時東京着、ただちに表面へ投宿、とりあえずご報、明日午前会いたし、と薄墨の走り書きの簡単極まるもので、表に裏神保町の宿屋の名と平岡常次郎という差出人の姓名が、表と同じ乱暴さ加減で書いてある。

「もう来たのか、昨日着いたんだな」と独り言のように言いながら、封書のほうを取り上げると、これは親爺の手蹟である。二三日前帰って来た。急ぐ用事でもないが、いろいろ話があるから、この手紙が着いたら来て

二

くれろと書いて、あとには京都の花がまだ早かったの、急行列車がいっぱいで窮屈だったなどという閑文字が数行列ねてある。代助は封書を巻きながら、妙な顔をして、両方見較べていた。

「君、電話をかけてくれませんか。家へ」

「はあ、お宅へ。何てかけます」

「今日は約束があつて、待ち合わせる人があるからあがないって。明日か明後日きつと伺いますからって」

「はあ。どなたに」

「親爺が旅行から帰つて来て、話があるからちよつと来いっていうんだが、——なに親爺を呼び出さないでもいいから、誰にでもそう言つてくれたまえ」

「はあ」

門野は無雑作に出て行つた。代助は茶の間から、座敷を通つて書斎へ帰つた。見ると、奇麗に掃除ができてゐる。落椿もどこかへ掃き出されてしまった。代助は花瓶の右手にある組み重ねの書棚の前へ行つて、上に載せた重い写真帖を取り上げて、立ちながら、金の留金を外して、一枚二枚と繰りはじめたが、中ごろまできてびたりと手をとめた。そこには二十歳ぐらいの女の半身がある。代助は眼を俯せてじつと女の顔を見つめていた。

着物でも着換えて、こつちから平岡の宿を訪ねようかと思つてゐるところへ、おりよく先方からやつて来た。

車をがらがらと門前まで乗りつけて、ここだここだと梶棒を下ろさした声はたしかに三年前分かれた時そっくりである。玄関で、取次の婆さんを捕まえて、宿へ裏口を忘れて来たから、ちよつと二十銭貸してくれと言つたところなどは、どうしても学校時代の平岡を思い出さずにはいられない。代助は玄関まで駆けだして行つて、手を執らぬばかりに旧友を座敷へ上げた。

「どうした。まあゆつくりするがいい」

「おや、椅子だね」と言いながら平岡は安楽椅子へ、どさりと身体を投げかけた。十五貫目以上もあるうというわが肉に、三文の価値を置いていないような扱い方に見えた。それから椅子の背に坊主頭をもたして、ちよつと部屋の中を見廻しながら、

「なかなか、いい家だね。思つたよりいい」と賞めた。代助は黙つて巻蓑入の蓋を開けた。

「それから、以後どうだい」

「どうの、こうの、——まあいろいろ話すがね」

「もとは、よく手紙が来たから、様子が分つたが、近こ

ろじゃちつとも寄こさないもんだから」

「いやどこもかしこも無沙汰で」と平岡は突然眼鏡を外して、背広の胸から皺だらけの手帛を出して、眼をばちばちさせながら拭きはじめた。学校時代からの近眼である。代助はじつとその様子を眺めていた。

「僕より君はどうだい」と言いながら、細い蔓を耳の後へ絡みつけに、両手で持って行った。

「僕は相変らずだよ」

「相変らずが一番いいな。あんまり相変るものだから」

そこで平岡は八の字を寄せて、庭の模様を眺めだしなが、不意に語調をかえて、

「やあ、桜がある。今ようやく咲きかけたところだね。

よほど気候が違う」と言った。話の具合がなんだか故のようにしんみりしない。代助も少し気の抜けたふうに、「向うはだいぶ暖かいだろう」とついで同然の挨拶をした。すると、今度はむしろ法外に熱した具合で、

「うん、だいぶ暖かい」と力のはいつた返事があつた。

あたかも自己の存在を急に意識して、はつと思つた調子である。代助はまた平岡の顔を眺めた。平岡は巻簾に火を点けた。その時婆さんがようやく急須に茶を淹れて持つて出た。今しがた鉄瓶に水を注してしまったので、煮立てるのに暇がいって、つい遅くなつてすみませんと言

訳をしながら、洋卓の上へ盆を載せた。二人は婆さんのしゃべってる間、紫檀の盆を見て黙っていた。婆さんは相手にされないの、独りで愛想笑いをして座敷を出た。

「ありや何だい」

「婆さんさ。雇つたんだ。飯を食わなくっちゃならないから」

「お世辞がいいね」

代助は赤い唇の両端を、少し弓なりに下のほうへ彎げて蔑むように笑つた。

「今までこんなところへ奉公したことがないんだから仕方がない」

「君の家から誰か連れて来ればいいのに。大勢いるだろう」

「みんな若いのはかりだね」と代助はまじめに答えた。

平岡はこの時はじめて声を出して笑つた。

「若けりやなおけっこうじゃないか」

「とにかく家の奴はよくないよ」

「あの婆さんの外に誰かいるのかい」

「書生が一人いる」

門野はいつの間にか帰って、台所のほうで婆さんと話をしていた。

「それぎりかい」

「それぎりだ。なぜ」

「細君はまだ貰わないのかい」

代助はこころもち赤い顔をしたが、すぐ尋常一般のきわめて平凡な調子になった。

「妻を貰ったら、君のところへ通知ぐらいするはずじゃないか。それよりか君の」と言いかけて、ぴたりとやめた。

代助と平岡とは中学時代からの知り合いで、ことに学校を卒業して後、一年間というものは、ほとんど兄弟のように親しく往来した。その時分は互にすべてを打ち明けて、互に力になり合うようなことを言うのが、互に娯楽のもつともなるものであった。この娯楽が變じて実行となったことも少なくないので、彼らは相互のために口にしたすべての言葉には、娯楽どころか、常に一種の犠牲を含んでいると確信していた。そうしてその犠牲を即座に払えば、娯楽の性質が、忽然苦痛に變ずるものであるという陳腐な事実にさえ気がつかずにいた。一年の後平岡は結婚した。同時に、自分の勤めている銀行の、京阪地方のある支店詰めになった。代助は、出立の当時、新夫婦を新橋の停車場に送って、愉快そうに、じき帰って来たまゝと平岡の手を握った。平岡は、仕方がない、

当分辛抱するさと打遣るように言ったが、その眼鏡の裏には得意の色が羨ましいくらい動いた。それを見た時、代助は急にこの友だちを憎らしく思った。家へ帰って、一日部屋へはいったなり考えこんでいた。嫂を連れて音楽会へ行くはずのところを断って、おおいに嫂に気を揉ましたくらいである。

平岡からは断えず音便があった。安着の端書、向うで世帯を持った報知、それが済むと、支店勤務の模様、自己将来の希望、いろいろあった。手紙の来るたびに、代助はいつも丁寧な返事を出した。不思議なことに、代助が返事を書くときは、いつでも一種の不安に襲われる。たまには我慢するのが厭になって、途中で返事をやめてしまふことがある。ただ平岡のほうから、自分の過去の行為に対して、いくぶんか感謝の意を表して来る場合に限って、やすやすと筆が動いて、比較的なだらかな返事が書けた。

そのうちだんだん手紙の遣り取りが疎遠になって、月に二遍が、一遍になり、一遍がまた二月、三月に跨がるように間をおいて来ると、今度は手紙を書かないほうが、かえって不安になって、何の意味もないのに、ただこの感じを駆逐するために封筒の糊を湿すことがあった。それが半年ばかり続くうちに、代助の頭も胸もだん